



発達段階に応じた体系的なキャリア教育の試行
～自分らしい生き方をする子どもの育成をめざして～

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育学部 公開日: 2016-08-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日野, 文貴, 村社, 弘之, 矢動丸, 博子, 的野, 美穂子, 外山, 千佳, 児玉, かおり, 山田, 慧美, 信時, 大輝, 戸ヶ崎, 泰子, Hino, Fumitaka, Murakoso, Hiroyuki, Yadomaru, Hiroko, Matono, Mihoko, Toyama, Chika, Kodama, Kaori, Yamada, Emi, Nobutoki, Daiki, Togasaki, Yasuko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5922

発達段階に応じた体系的なキャリア教育の試行

～自分らしい生き方をする子どもの育成をめざして～

日野文貴²⁾ 村社弘之¹⁾ 矢動丸博子¹⁾ 的野美穂子²⁾ 外山千佳¹⁾
児玉かおり²⁾ 山田慧美¹⁾ 信時大輝³⁾ 戸ヶ崎泰子⁴⁾

The Trial of Systematic Career Education According to the Developmental Stage —To Bring up Children who Achieve the Lifestyle One Desires—

Fumitaka HINO, Hiroyuki MURAKOSO, Hiroko YADOMARU,
Mihoko MATONO, Chika TOYAMA, Kaori KODAMA,
Emi YAMADA, Daiki NOBUTOKI, Yasuko TOGASAKI

I. 問題と目的

中央教育審議会(2011)は、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」において、近年の「若者の社会的・職業的自立」や「学校から社会・職業への移行」を巡る様々な問題に対して、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、大学、高等専門学校、専修学校(専門課程、高等課程)の各学校段階、また、初等中等教育及び高等教育を通じて、組織的・体系的にキャリア教育・職業教育を行う必要があると述べている。さらに、特別支援学校高等部卒業者の就職割合が2割強という厳しい就職状況であることから、個々の障害の状態に応じたきめ細かい指導・支援の下で、適切なキャリア教育を行うことが重要であると述べている。宮崎県の特別支援学校高等部卒業生の就職状況については、宮崎県教育委員会特別支援教育室(2012)が「特別支援学校キャリア教育ガイドブック」において、平成19年度から平成23年度の就職率の推移を示しており、全国平均よりも就職率が低い状況にあり、加えて就職希望率も低いことを報告している。また、学校教育においてキャリア教育を推進していくためには、その意義を明確にし、学校の教育活動全体をとおして、組織的、系統的に取り組んでいくことが重要であると述べている。他にも、岩手県立総合教育センター特別支援教育室(2008)は、「特別支援学校(知的)キャリア教育推進ガイドブック理解編」を作成している。そして、知的障害者にとっての「働くこと」「就職すること」の意義について、「働いて賃金を得るということは、具体的な社会参加の形態の一つであり、本人の生活の自立につながります。それ以外にも、自分が社会で役に立っているという有用感や満足感、規則正しい生活の保障、自分の可能性についての自信にもつながっていくものであり、『生活の質(QOL)』の向上につながります。日本国憲法では『労働』は国民の義務の一つですが、同時に基本的な権利として、障害の程度にかかわらず保障されるべきものなのです」と述べ、知的障害者にとってのキャリア教育の意義を説明している。

1) 宮崎大学教育文化学部附属小学校

2) 宮崎大学教育文化学部附属中学校

3) 新富町立富田中学校

4) 宮崎大学教育学部

このような社会情勢や社会の要請をふまえて、特別支援学校等におけるキャリア教育に関する研究や実践がより一層推し進められるようになってきた。例えば、菊池（2011）は、ライフキャリアの視点から作成された「キャリア発達段階・内容表（試案）」（国立特別支援教育総合研究所，2008）に基づいて①教育課程の分析及び改善のためのツール，②授業の分析及び改善のためのツールを作成し、特別支援学校におけるキャリア教育の実践を行っている。また、大崎（2011）は、この試案に基づいて「本人の願い」の把握と支援の充実のためのツールを開発し、このツールを活用することで、「本人の願い」に対する支援についての共通理解が図られ、キャリア教育における「本人の生き方」への支援を考えることができると報告している。

そういった取り組みの結果、障害者の雇用者数は年々増加し、2014年の特別支援学校高等部卒業者の就職率は28.4%、知的障害においては31.1%になった（文部科学省，2015）。宮崎県の特別支援学校高等部卒業者の就職率についても、過去最低だった2009年度と比べると、2014年度は12.5ポイント高い27.0%。最大約9%下回っていた全国平均との差も2013年度には1%まで縮まった。そして、宮崎県教育委員会は、このような就職率の上昇には、特別支援学校に配置されている自立支援推進員等による就労支援の充実に加え、企業の障害者雇用に対する理解が進んだことが背景にあると説明している（宮崎日日新聞，2015）。西川（2013）も、障害者の雇用者数の増大について「障害者の雇用の促進等に関する法律の施行により、障害者雇用は、雇用義務制度が始まった昭和52年から漸進的に進展し、特に、近年は障害者の雇用者数は飛躍的に増大している。近年の急激な伸びは、企業の社会的責任への関心の高まりや障害者の就労意欲の向上に加え、教育現場でのキャリア教育や福祉現場での就労支援の充実が背景にあり、それらが有機的に関連している結果と言える」と述べている。このように、教育委員会の取組や障害者雇用促進法による就労支援の充実、企業の理解、障害者の就労意欲の向上、そして、教育現場でのキャリア教育の充実によって、障害者の雇用者数は増加方向に推移している。

以前に比べると確かに障害者の雇用者数は増大してきてはいるものの、多くの障害者の就労が実現しているとはいえない。先にも述べたように、特別支援学校高等部卒業生（知的障害者）の就職率は31.1%であり、まだ約70%の卒業生が就職には結びついていない現状がある（文部科学省，2015）。また、宮崎県の特別支援学校高等部卒業生の平成23年度の就職希望率は全卒業生徒数の25.8%と少なく、大半の高等部卒業生が「就労」という形での社会参加、社会的自立の自己像を思い描けていない状況にある。さらに、就職後の離職に関する問題も指摘されており、埼玉県産業労働部就業支援課（2011）による障害者離職状況調査報告書では、平成21年度の埼玉県の離職した障害者が1200名以上であることが報告されている。教育現場におけるキャリア教育の内容等についての課題も指摘されている。例えば、菊池・松為・杉中（2012）は、「平成21年に学習指導要領が改訂され、特別支援学校におけるキャリア教育が高等部学習指導要領総則に位置付けられたことで、キャリア教育の推進の必要性を感じ、何らかの取り組みを始めている特別支援学校は多いが、キャリア教育の組織的理解については模索段階にある学校が大半である」と、特別支援学校におけるキャリア教育が発展途上であることを指摘している。以上のように、キャリア教育に関する課題は山積しており、障害のある児童生徒の勤労観・職業観を育て、就労を実現し、働き続けることができるようにするためには、よりよいキャリア教育の在り方を検討し、実践を積み重ね、その成果を検証していく必要がある。

宮崎大学教育学部附属小中学校の知的障害特別支援学級においても、キャリア教育を教育課程に位置付け、キャリア教育の年間指導計画にそって、教科・領域を合わせた指導、教科別の

指導、領域別の指導、総合的な学習の時間、学校行事（以下、各教科・領域等と略記する）においてキャリア教育を行っている。しかし、小・中学校9年間を見通した体系的な指導を展開するまでには至っていないという課題がある。そこで本研究では、まず国立特別支援教育総合研究所（2010）の「知的障害のある児童生徒の『キャリアプランニング・マトリックス（試案）』」や宮崎県教育委員会特別支援教育室（2012）の「特別支援学校キャリア教育ガイドブック」に基づいて「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」及び「小・中学校9年間のキャリア教育全体計画」を作成する（研究Ⅰ）。そして、この評価票を用いて確認した児童生徒の重点指導課題について、「小・中学校9年間のキャリア教育全体計画」をふまえた体系的なキャリア教育を試行し、その成果を検証する（研究Ⅱ）。

Ⅱ. 研究Ⅰ：「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」及び「小・中学校9年間のキャリア教育全体計画」の作成

1. 目的

宮崎大学教育学部附属小中学校知的障害特別支援学級において、小・中学校9年間を見通した体系的なキャリア教育を展開するために、児童生徒のキャリア発達に関連する能力やスキルを評価するための「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」及び知的障害児に対するキャリア教育の実践を方向づける「小・中学校9年間のキャリア教育全体計画」を作成する。

2. 「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」の作成

小・中学校特別支援学級担当教員8人によって、「知的障害のある児童生徒の『キャリアプランニング・マトリックス（試案）』」（国立特別支援教育総合研究所，2010）が示している「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4領域それぞれに当てはまる具体的な能力やスキルをリストアップした。その結果、95項目の能力やスキルが収集された。次に、この95項目を「育てたい力」の種類ごとに分類・整理した。その結果、「人間関係形成・社会形成能力」領域については5種類27項目、「自己理解・自己管理能力」については2種類8項目、「課題対応能力」については3種類15項目、「キャリアプランニング能力」については8種類45項目といったような分類になった。さらに、児童生徒のキャリア発達の段階を明確にすることができるように、「育てたい力」のそれぞれに分類された各項目の難度について検討し、難度順に並べ替えを行った。以上の検討結果を整理したものを「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」とした（Table 1）。

評定は、児童生徒の担当教員4名が協議して、項目ごとに4段階（4：通常の学級と特別支援学級のいずれにおいてもできる，3：特別支援学級においてできる，2：教師が言葉かけをしてできる，1：教師と一緒にできる）で行うこととした。

3. 「小・中学校9年間のキャリア教育全体計画」の作成

「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」に示している「育てたい力」を、小・中学校9年間の体系的なキャリア教育を通して育てることができるように、小学校及び中学校の特別支援学級それぞれの教育活動を見直し、「小・中学校9年間のキャリア教育全体計画」を作成した。キャリア教育全体計画は、児童生徒の9年間の発達段階にそって「育てたい力」の能力やスキルを整理し、その上で「学校の教育目標」「特別支援学級の目標」「キャリア教育の目的」「平

成27年度の重点目標」「児童生徒・保護者の願い」「各教科との関連」との関連づけを行った。以上の検討結果を整理したものを「小・中学校9年間のキャリア教育全体計画」とした (Fig. 1)。



Fig. 1 小・中学校9年間のキャリア教育全体計画

4. まとめ

研究Ⅰにおいて、各学校段階で身につけておきたいキャリア発達に関連する能力やスキルについて整理し、「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」を作成したことで、児童生徒の能力やスキルの評価が可能になった。また、この発達段階評価票を用いて児童生徒のキャリア発達に関連する能力やスキルを評価することで、児童生徒一人ひとりの課題が明確になり、彼らの課題に合わせて各教科・領域等の指導内容や指導方法の工夫や充実を図ることが可能になると考えられる。さらに、指導後の児童生徒のキャリア発達に関連する能力やスキルを再評価することで、指導の成果を確認したり、その後の指導方針を再検討したりすることも可能になると期待される。

「小・中学校9年間のキャリア教育全体計画」を作成したことで、本特別支援学級における教育活動全体をキャリア教育の視点から見直し、小・中学校の教育目標及び本特別支援学級の教育目標、キャリア教育の目的、児童生徒・保護者の願いとキャリア発達の4領域との関連を系統的に整理することができた。そして、平成27年度のキャリア教育に関する重点目標と各教科・領域等や進路指導・生徒指導との関連づけを行い、キャリア教育の視点を盛り込んだ各教科・領域等の単元指導計画を立てることができた。さらに、以上のような検討を本特別支援学級の担当教員全員で行ったことで、キャリア教育の組織的な取り組みに必要な共通理解を図ることができた。

今後の課題としては、まず、「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」を用いて、児童生徒のキャリア発達に関連する能力やスキルのアセスメントを行い、その結果をふまえながら「小・中学校9年間のキャリア教育全体計画」にそって、それぞれの児童生徒へのキャリア教育を実践し、その成果を検証する必要がある。さらに、その教育実践の結果から、研究Ⅰで作成した「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」の信頼性と妥当性、「小・中学校9年間のキャリア教育全体計画」の妥当性と有用性を確認する必要がある。そして必要があればそれらの改訂を行なっていかなければならない。

Ⅲ. 研究Ⅱ：「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」と「小・中学校9年間のキャリア教育全体計画」を用いた体系的なキャリア教育の試行

1. 目的

研究Ⅰにおいて作成した「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」を用いて児童生徒のキャリア発達上の課題を確認する。そして、その評価結果をふまえながら「小・中学校9年間のキャリア教育全体指導計画」にそった体系的なキャリア教育を実施し、その効果を確認する。

2. 方法

(1) 対象児童生徒：

対象児童生徒は、小学校知的障害特別支援学級に在籍する児童10名と中学校知的障害特別支援学級に在籍する生徒14名の合計24名とした。

(2) アセスメント内容：

特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票 (Table 1)：本尺度は、研究Ⅰで作成した95項目からなる児童生徒のキャリア発達に関連する能力やスキルの状態を把握するための評価票

である。評定は、児童生徒の担当教員4名が協議して、項目ごとに4段階（4：通常の学級・特別支援学級においてできる，3：特別支援学級においてできる，2：教師が言葉かけをしてできる，1：教師と一緒にできる）で行った。

（3）アセスメント時期：

本支援学級におけるキャリア教育の実践前（7月）と実践後（12月）の2回評定を行った。

（4）キャリア教育の重点指導課題の決定：

事前アセスメントの結果に基づき、指導課題とすべき児童生徒に育てたい力を選出した。選出にあたっては、①評価点が1～2点の項目が半数以上の「育てたい力」、②「児童生徒・保護者の願い」に関連する「育てたい力」、③指導によって向上が期待できると担任教師が判断した「育てたい力」という3つの基準を設け、それらの基準に当てはまる「育てたい力」を重点指導課題とした。これらの選出基準にしたがって、児童生徒の一人ひとりの重点指導課題を選出した結果、中学校の場合はTable 2に示すような重点指導課題が選出された。例えば、対象生徒Eの場合、選出基準①に該当する「育てたい力」として、「人間関係形成・社会形成能力領域」、「自己理解・自己管理能力領域」、「課題対応能力領域」のすべての「育てたい力」と「キャリアプランニング能力領域」の「情報の収集と活用」「社会のきまり」「進路計画」が選出された。その中から選出基準②の「児童生徒・保護者の願い」である「コミュニケーション力や自分で考え行動する力の向上」に関わり、かつ選出基準③に該当する「育てたい力」として、「人間関係形成・社会形成能力領域」の「協力・共同」「意思表現」「場に応じた言動」、「自己理解・自己管理能力領域」の「自己理解」、「課題対応能力領域」の「選択（決定・責任）」を重点指導課題とした。

（5）「個別のキャリア教育年間指導計画」の作成とキャリア教育の実践：

キャリア教育の実践にあたっては、「小・中学校9年間のキャリア教育全体計画」にそって「個別のキャリア教育年間指導計画」を作成する必要がある。そこで、各教科・領域等の年間指導計画の中からキャリア教育に関連する単元や内容を抜き出し、それぞれの単元や内容においてどのような「育てたい力」を向上させることができるかを確認・整理した。その上で児童生徒一人ひとりの重点指導課題の達成に関係する単元や内容を抽出し、それらの単元・内容においてどのような指導の工夫が必要かについての検討を加えて、「個別のキャリア教育年間指導計画」としてまとめた（Table 3）。以上のような手続きによって作成した「個別のキャリア教育年間指導計画」に基づいて、教育活動全体にわたるキャリア教育を展開した。

発達段階に応じた体系的なキャリア教育の試行
～自分らしい生き方をする子どもの育成をめざして～

Table 3 個別のキャリア教育年間指導計画（中学校第2学年；対象生徒E）

時期	教科等「単元名/主題名」	人間関係形成・社会形成能力		自己理解・自己管理能力		課題対応能力		キャリアプランニング能力													
		人とのかわり（反応）	他者理解	協力・共同	意思表現	場に応じた言動	自己理解	ストレスマネジメント	目標設定	選択（決定・責任）	肯定的な自己評価	情報の収集と活用	社会のきまり	金銭の管理	働くことの意義	習慣形成	夢や希望	生きがい・やりがい	進路計画		
																			指導の工夫例	他教科・領域等との関連	
4月	日常生活の指導 「気持ちのいい挨拶を考えよう」	○	○	○	◎	◎	◎	○	○	○										・ 「良い挨拶」について考えることが出来るように、はきはきとした声と小さな声での挨拶のロールプレイングを行う。（場に応じた言動）	自立活動「上手なあいさつをしよう」 学習「学生生活の見過しをしよう」 英語「挨拶をしよう」「自己紹介しよう」
5月	作業学習 「オリエンテーション」 作業学習「園芸・技術科栽培共同学習」 「ピクト交流（園芸）」	○	○	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		・ 園芸の際に、クワやシャベル等の道具を用いたり、歌を作ったり、マルサシロールを張ったり、書道や折り紙など、様々な社会経験をできるようにする。（自己理解）	自立活動「ジャンケン列走」 自立活動「気持ちよく生活しよう」 生活単元学習Ⅱ「進路について考えよう」
6月	自立活動 「就業体験学習のリハーサルをしよう①」	○	○	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○		・ 様々な接客の場面を設定し、対応する練習を行う。目標をもって話ができるようにクエーダー役は最後に行うようにする。（場に応じた言動）	学校行事「就業体験学習（2回目）」 生活単元学習Ⅱ「就業体験学習を成功させよう①」 生活単元学習Ⅰ「「宮大農場に行こう」
7月	生活単元学習Ⅰ 「スマホコン販売を成功させよう」	○	○	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○		・ 販売の担当を決める際に、友達の影響を受けて自分の意見を言わないように、自分の意見が勝つたときに「勝りました」と褒めるようにする。（意思表現）	数学グループが「いくらかな」 生活単元学習Ⅰ「宮大農場に行こう」 美術「スマホコン販売の絵を描こう」
8-9月	総合的な学習の時間 「趣味につながる活動」 ・フットボール部の活動 ・いちよう学級と合同の活動	○	○	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎		・ 小学生と一緒に協力して活動できるように、事前にかわり方の練習を行う。（協力・共同）	自立活動「友達の良いところを探そう」 自立活動「ゲームを作って遊ぼう①」 生活単元学習Ⅱ「市内見学について考えよう」 数学グループが「いくらかな」 生活単元学習Ⅰ「練習を成功させよう」
10月	作業学習 「橋で販売しよう」	○	○	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○		・ 商品を袋に詰めたり、橋札を貼ったり、売り場の整頓の作成をするなど、協力して販売の準備を行う。（協力・共同）	美術「橋の準備をしよう」 英語グループが「練習での販売に向けてハルを作ろう」 数学グループが「文章問題に挑戦しよう」
11月	生活単元学習Ⅱ 「修学旅行に行こう」	○	○	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○		・ 個別自主研修などの計画を協力して立てることが出来るように、話し合いのルールを決める。（協力・共同）	自立活動「友達と話を広げよう」 「名刺交換ゲーム」
12月	自立活動 「冬休みの過ごし方を考えよう」	○	○	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎										・ 冬休みに毎日継続して行うことを決めることができるように、冬休みの計画を立てることが出来るように、生活単元学習Ⅱ「今年を振り返りよう」、生活単元学習Ⅰ「立派な成功させよう」	
1月	総合的な学習の時間 「趣味につながる活動」 ・フットボール部の活動 ・いちよう学級と合同の活動	○	○	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	◎		・ 約引に貼ける様々な作業の経験をおし、得意なことやできること、できそうなのが分かるように実演する。（自己理解）	自立活動「ゲームを作って遊ぼう②」 数学グループが「英さを探ろう」
2月	生活単元学習Ⅱ 「就業体験学習を成功させよう②」	○	○	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	◎		・ 担当した仕事を最後まで責任をもってやり遂げることが出来るように、就業体験学習の目標を一人ひとりに設定する。（選択・決定・責任）	学校行事「就業体験学習（2回目）」 自立活動「就業体験学習のリハーサルをしよう②」
3月	生活単元学習Ⅰ 「1年間のふりかえり発表会を成功させよう」	○	○	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎	○									・ 発表直前の練習において、ペアで発表練習を行い、感想やアドバイスを交換し合う場を設ける。（意思表現）	英語グループが「思い出を作文にしよう」 総合的な学習の時間「趣味につながる活動」 生活単元学習Ⅱ「1年間の振り返りよう」 学活「年間反省をしよう」

本年度の重点指導課題・・・◎ 教科・領域等で育てることが可能な「育てたい力」・・・○

生活単元学習Ⅰ・・・全学年の特別支援学級合同で行う生活単元学習

生活単元学習Ⅱ・・・学級で行う生活単元学習

3. 結果と考察

(1) キャリア教育による「キャリア発達領域」ごとの得点の変化：

キャリア教育の効果を確認するために、キャリア教育前後の「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」の得点について、キャリア発達の領域ごとに1要因の分散分析を行った。その結果、小学校児童のキャリア発達の領域別得点については、Table 4に示すとおり、「自己理解・自己管理能力」を除くすべての領域得点に有意な得点上昇が確認された(いずれも $p < .01$)。また、中学校生徒の領域別得点については、Table 4に示すとおり、すべての領域得点に有意な得点上昇が確認された(いずれも $p < .01$)。

Table 4 キャリア発達の各領域の平均値と標準偏差及び分散分析結果

	小学校 $n=10$			中学校 $n=14$		
	7月	12月	F値	7月	12月	F値
人間関係形成・ 社会形成能力	50.00 (12.20)	62.50 (10.52)	57.05**	77.29 (12.83)	82.86 (11.78)	54.62**
自己理解・ 自己管理能力	9.80 (2.04)	9.80 (2.04)	0.00	20.71 (4.22)	22.21 (3.99)	54.60**
課題対応能力	26.80 (3.60)	28.30 (3.66)	19.29**	40.36 (6.57)	12.79 (6.30)	18.69**
キャリア プランニング能力	51.80 (6.24)	58.20 (9.74)	20.43**	126.93 (25.49)	137.93 (21.90)	33.17**

カッコ内は標準偏差

* $p < .05$, ** $p < .01$

(2) キャリア教育による「育てたい力」ごとの得点の変化：

次に、キャリア教育で育てたい力の種類ごとに1要因の分散分析を行った。その結果、小学校児童のキャリア教育で育てたい力の種類別の得点については、Table 5に示すとおり、ほとんどの育てたい力の得点が有意に向上したが、「自己理解・自己管理能力領域」の育てたい力や「課題対応能力領域」の「ふりかえり・肯定的な自己評価」, 「キャリアプランニング能力領域」の「夢や希望」, 「生きがい・やりがい」, 「進路計画」については全く変化していないことが確認された。また、中学校生徒の育てたい力の種類別の得点については、Table 5に示すように「自己理解・自己管理能力領域」の「ストレスマネジメント」と「キャリアプランニング能力領域」の「夢や希望」を除くすべての得点が有意に上昇した。

(3) キャリア教育による各児童生徒の重点指導課題別の得点の変化：

それぞれの小学校児童の重点指導課題の得点の変化については、1項目あたりの平均増加量が0.15~0.48と個人差が大きいものの、いずれの児童の重点指導課題も達成方向にあることが明らかにされた。また、中学校生徒それぞれの重点指導課題の得点についても、1項目あたりの平均増加量が0.08~0.46と個人差が大きく、中には平均増加量が0.08とごくわずかな生徒もいた。しかし、いずれの生徒の重点指導課題も概ね達成方向に変化していることが確認された。

以上のことから、本研究で作成した「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」によ

るアセスメント結果に基づき、「小・中学校9年間のキャリア教育全体指導計画」にそって作成した「個別のキャリア教育年間指導計画」を用いた体系的なキャリア教育は、児童生徒のキャリア発達を促すことに有効であったと言える。特に、児童生徒一人ひとりの重点指導課題を意識した教科・領域等を関連づけた繰り返しの指導が、重点指導課題の達成を促す上で非常に有効であったことが確認された。

Table 5 キャリア発達の各領域における育てたい力の平均値と標準偏差及び分散分析結果

		小学校 n=10			中学校 n=14		
		7月	12月	F値	7月	12月	F値
人間関係形成・社会形成能力	人とのかかわり(反応)	9.50 (3.47)	12.00 (1.84)	12.64**	12.36 (1.99)	12.79 (2.11)	9.75**
	人とのかかわり(他者のよさ)・他者理解	6.80 (1.54)	10.10 (1.70)	121.00**	13.64 (2.66)	14.64 (2.35)	18.20**
	集団参加と協力・共同	10.40 (2.94)	13.00 (2.40)	23.05**	17.43 (2.67)	18.57 (2.38)	30.81**
	意思表示	10.40 (2.58)	12.70 (2.00)	47.14**	16.43 (3.60)	18.21 (3.12)	19.12**
	あいさつ・清潔・みだしなみと場に応じた言動	12.90 (2.74)	14.70 (3.47)	13.50**	17.43 (3.16)	18.64 (3.20)	25.91**
自己理解能力・自己管理能力	ひとのかかわり(自分のよさ)・自己理解	6.30 (1.68)	6.30 (1.68)	0.00 n.s.	11.86 (2.82)	12.93 (2.58)	30.15**
	ストレスマネジメント	3.50 (0.81)	3.50 (0.81)	0.00 n.s.	8.86 (1.77)	9.29 (1.62)	4.50 n.s.
課題対応能力	目標設定	8.60 (0.92)	9.30 (1.19)	21.00**	13.43 (2.35)	14.43 (2.26)	15.17**
	選択・決定・責任	9.60 (2.01)	10.40 (1.85)	7.58*	13.71 (2.05)	14.71 (2.08)	22.75**
	ふりかえり・肯定的な自己評価	8.60 (0.92)	8.60 (0.92)	0.00 n.s.	13.21 (2.57)	13.64 (2.50)	6.16*
キャリアプランニング能力	様々な情報への関心・情報の収集と活用	7.70 (1.01)	8.40 (1.85)	3.64 n.s.	15.86 (3.36)	16.71 (3.22)	17.33**
	社会のきまり	5.80 (0.87)	7.80 (1.83)	16.36**	16.36 (3.24)	18.64 (1.84)	8.28*
	金銭のあつかい・金銭管理	7.30 (1.01)	7.60 (1.20)	1.98 n.s.	16.79 (2.70)	17.14 (2.70)	7.22*
	役割の理解・分担と働くことの意義	3.30 (1.19)	4.50 (1.12)	81.00**	30.64 (7.30)	33.21 (6.34)	26.49**
	習慣形成	10.40 (1.69)	12.40 (3.38)	6.67*	16.93 (2.91)	19.00 (2.88)	29.00**
	夢や希望	7.50 (0.92)	7.70 (1.01)	2.25 n.s.	12.86 (2.47)	13.07 (2.37)	1.92 n.s.
	生きがい・やりがい	9.80 (1.25)	9.80 (1.25)	0.00 n.s.	14.43 (2.26)	15.50 (2.41)	16.16**
	進路計画	1.00 (0.00)	1.00 (0.00)	0.00 n.s.	6.50 (1.68)	7.21 (1.78)	19.12**

カッコ内は標準偏差

* $p < .05$, ** $p < .01$

IV. 総合考察

本研究の結果、「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」を用いて児童生徒のキャリア発達上の課題を確認し、その評価結果をふまえながら児童生徒それぞれの重点指導課題に応じた指導の工夫を行うことは、キャリア発達に関連する能力やスキルの向上を促すのに有効であったことが確認された。また、キャリア教育の実践において、「小・中学校9年間のキャリア教育全体指導計画」にそって作成した「個別のキャリア教育年間指導計画」を活用することは、系統立った指導を行う上で非常に有効であった。特に、キャリア教育の領域の一つである「人間関係形成能力・社会形成能力」が多くの児童生徒の重点指導課題となっていることが確認でき、そのことをふまえて通常の学級の児童生徒との交流及び共同学習の機会を多く設定したり、異年齢の児童生徒やサイズの異なる集団の中で活動する全学年合同の授業を計画したりして、さまざまな場面や設定の中で多様な人と関わる経験を積み重ねることができるようになるように教育活動の内容や指導方法に工夫を施すことが可能になった。また、生活単元学習や自立活動、学校行事に関連づけながら繰り返しの学習ができるようにした。このような課題の焦点化や指導上の工夫を行ったことが、キャリア教育領域の「人間関係形成能力・社会形成能力」に含まれるすべての「育てたい力」の向上に結びついたものと考えられる。

キャリア教育領域の「課題対応能力」、特に「目標設定」と「選択・決定と責任ある遂行」といった「育てたい力」が向上した理由としては、小・中学校共に毎回の授業時間において、授業の見通しをもたせたり、目標設定をしたりするような指導上の工夫を行い、課題選択や自己決定を促すような働きかけを日常的に行ったことが挙げられる。キャリア教育領域の「キャリアプランニング能力」に含まれる「社会のきまり」が向上した理由としては、学校生活のきまりを守る日常的な指導や学校生活にきまりがないとどうなるかを考える授業を行ったり、校外学習及びその事前指導において、交通ルール、買い物のルール、公共施設でのマナーの指導を今まで以上に充実させたりしたことを挙げるができる。また、「キャリアプランニング能力」に含まれる「役割の理解・分担と働くことの意義」が向上した理由としては、学級内での係活動や行事等において与えられた自分の役割を自覚し、その役割や責任を果たすことができるように教師の援助を少しずつ減らしたり、校外学習で働く人の様子を深く観察できるように事前指導を行ったり、職場体験学習を通して達成感や働く喜びを味わうことができるように事前練習の機会を増やしたりしたことを挙げるができる。また、「働くこと」について考えたり、身近な人に仕事についてのインタビューをして、それを発表する授業を行ったりしたことも働くことの意味や意義の理解を深めることにつながったと考えられる。

しかし、重点指導課題に関する個別の変化を見てみると、重点指導課題として決定した「育てたい力」の向上の程度が小さい児童生徒もいた。「育てたい力」の向上の程度が小さかった理由としては、①教師の援助があればできる状態から、自分一人のできる状態への移行段階でつまづくことが多かったこと、②活動への取り組みに波があるといった障害特性から生じる情緒不安定性に対する適切な対応や指導上の配慮が不十分だったために、学んだスキルを児童生徒が安定的に発揮することができなかったことが考えられる。他にも、キャリア発達段階評価票の得点が事前アセスメントの段階でほぼ最大値に達していたため、成長の程度を評価することができなくなっていたり、具体的なスキルや能力の難度が中学生段階のものが多くて、小学生の評価には適さない「育てたい力」があったりするといったアセスメント尺度の問題も関係していると考えられる。

したがって今後の課題としては、まず、「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」と「小・中学校9年間のキャリア教育全体計画」の改訂を行い、その上で信頼性・妥当性を再確認する必要があると言える。さらに、小学校と中学校のつながりだけではなく、高等学校・特別支援学校高等部とのつながりも検討し、より一層の体系的なキャリア教育を行っていくことも必要である。そういった点から考えると、「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」と「小・中学校9年間のキャリア教育全体計画」の改訂に係る検討では、上級学校におけるキャリア教育の方向性をもふまえた改訂作業を行っていく必要があると言える。また、キャリア発達に関連する能力やスキルは、日常生活全般を通じて高められるものである。すなわち、キャリア発達の促進には、家庭と学校との連携を図っていくことが不可欠である。今後は、このような課題をふまえたより効果的なキャリア教育を長期にわたって継続的に実践し、その効果の検証を積み重ねていかなければならない。

V. 文献

- 中央教育審議会答申（2011）今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について。
- 岩手県総合教育センター特別支援教育室（2008）特別支援学級（知的）キャリア教育推進ガイドブック 理解編。
- 菊池一文（2011）キャリア教育の視点による教育課程及び授業の改善・充実を図るためのツールの開発と試行。国立特別支援教育総合研究所研究紀要，38，31-46。
- 菊池一文・松為信雄・杉中拓央（2012）特別支援学校におけるキャリア教育の現状と課題に関する調査（1）－キャリア教育の推進状況及び用語の認知度を中心に－。日本特殊教育学会第50回大会発表論文集，USB。
- 国立特別支援教育総合研究所（2008）知的障害者の確かな就労を実現するための指導内容・方法に関する研究。平成18・19年度課題別研究報告書
- 国立特別支援教育総合研究所（2010）知的障害教育におけるキャリア教育の在り方に関する研究－「キャリア発達段階・内容表（試案）」に基づく実践モデルの構築を目指して－。研究成果報告書
- 宮崎県教育委員会特別支援教育室（2012）特別支援学校キャリア教育ガイドブック。
- 宮崎日日新聞（2015）支援学校の就職率好調。2015年5月16日朝刊，pp.21。
- 文部科学省（2015）特別支援教育資料。
- 西川昌登（2013）障害者雇用の状況と今後の課題，進路指導の方向について。尾崎雄三・松屋勝宏（編），キャリア教育の充実と障害者雇用のこれから。ジヤーズ教育新社，pp.8-13。
- 大崎博史（2011）キャリア教育の視点による個別的教育支援計画における「本人の願い」の把握及び支援の充実を図るためのツールの開発と試行。国立特別支援教育総合研究所研究紀要，38，47-64。
- 埼玉県産業労働部就業支援課（2011）障害者離職状況調査報告書。